

# 湧水

平成二十四年七月 発行（年二回発行）  
『湧水』 創刊号 通巻第一号



千代田岳精会  
自作自詠俳句研修会

大雪山国立公園『銀河の滝』

## ご挨拶

千代田岳精会会長

鈴木龍成

千代田岳精会「自作自詠俳句研修会」会員の皆様による句集「湧水」の創刊誠におめでとうございます。

平成二十二年四月、俳句同好の吟友が集まったの研修スタートでしたが、橋本リーダーを中心に会員皆様のご協力の賜と、ご同慶に耐えない次第です。

私どもの“吟楽は”、漢詩を主流としてはいますが、此れに加えての短歌、俳句、そして新体詩のジャンルへの関わりは非常に意義深いものと思います。まして、自作のそれを自分で吟ずることは無上の喜びだと言えます。

かつて、私が担当したハザマ教場で、いまま先輩会員としてご活躍中のAさんの名句を、新年初吟として皆さんと吟じた事を思い出します。いわば“自作自詠”の走りと言えましょうか。

これからも、会員皆様の名句が吟声高らかに響きわたる事を心からお祈り致します。

## 発刊にあたって

自作自詠俳句研修会顧問

前田道人

かねてより検討されていた自作自詠俳句研修会は、平成二十二年四月に発足した。会長はじめ諸先輩方のお力添えを頂きました。経験豊かな橋本リーダー、湯山顧問を指導役とし明治安田ビル内にその産声を上げました。

本会はあくまでも千代田岳精会の研修活動の一環であり、(一)自分の俳句を作る(二)先人の俳句を味わう(三)俳句を吟じる、そのことの中で吟楽を仲間と共有することにある。原則として毎月第二火曜日を例会とし「はじめての俳句」を実践している。また、ゲスト俳人をお迎えしたり、郊外での吟行会を通じて貴重な経験を積んでいる。

今回の合同句集の発刊は、本会の大きな挑戦である。会員のひとり一人がそれぞれ役割を担ってとり組んだ結集である。この大仕事を機にさらに皆で楽しく向上していきたいと思う。

読者各位の参加を期待すると共に、今後共のご支援をお願い申し上げます。

千舟	順治	陵人	明山	合風	利広	朝香	童人	輝夫	ひさ	烏城	蓮花	俳号
橋本隆一	徳本順治	鈴木重成	小林智子	久保合介	菊地利廣	河合節子	川口榮三	鵜飼輝夫	稲垣ひさ	磯田貞二	池田康子	氏名
十二	十一	十	九	八	七	六	五	四	三	二	一	頁
龍慶	得自楼	のぼる	いくよ	道人	をさむ	桜子	弘輝	壽	如泉	玄猷	俳号	
岩崎泰俊	湯山徳次郎	耳塚昇	三須以久代	前田道紀	細川修	本多敦子	本多弘幸	藤原寿子	林治一	八田豊	氏名	
二十三	二十二	二十一	二十	十九	一八	一七	一六	一五	一四	一三	頁	

## 『桜』

池田蓮花

(康子)

梅蕾む垣根ごしなる一枝かな

人待ちて葉桜の街灯るなり

桜咲き川面のふちももいろに

柏餅孫の成長願いけり

晩年の母に似てきし花見かな

友の訃の届く夕べや花菖蒲

『左義長』

磯田鳥城

(貞二)

笹鳴きの稚拙が嬉し妻と聴く

独り居の庭に一輪寒椿

牡丹芍薬そにせつかれてお礼肥

君居ませず何の桜か遊歩道

左義長の残り火になほ血の疼く

神童も小町もけふの日向ぼこ

『若葉』

稲垣ひさ

(ひさ)

鶯の声に目覚めて雨後の朝

大空に鶯のこえ冴え響く

日差しにも風も春めく匂いして

ふくらみし木々の若芽の春めける

若葉燃ゆ園児の声やかん高し

朝風に若葉の香りさわやかに

『紫陽花』

鵜飼輝夫

(輝夫)

ここに住み幾歲月か松飾

陽だまりのねこ居眠りて春めけり

数かぞへ縄とびする児水温む

春めくや踏み石ぬれて庭の朝

名刹の庭にあぢさゐ花揃ふ

雨に濡れ庭に艶めく春の薔薇

『春動く』

川口童人

(榮三)

待ち侘びし櫻の花も北目指し

至福かな熱爛重ね夜の更ける

目白舞いついばみ遊ぶ庭の梅

梅雨晴れや飛び出す子らと父あそぶ

山門の扁額霞む梅雨の朝

吐く息も薄くなりゆき春動く

『観覧車』

河合朝香

(節子)

松飾り取れて街並み普段めく

靴音を聞いて夕餉の爛熱し

門十歩枝垂櫻の大樹かな

走り根につまづきもして花を見る

観覧車ゆつくり廻り春動く

祭り髪深川の路地颯爽と

『男結び』

菊地利広

(利廣)

松門の男結びで飾りけり

桜咲く上野の森に出かけけり

若緑木々高くして深大寺

バラ園に陽一杯の深大寺

詩吟終へビルの谷間に夏の月

昼下がりに祭りばやしを遠くきく

『若葉萌ゆ』

久保合風

(合介)

水温む光あまねし田に満ちて

バイクにも頭をさげて初日かな

池碧く波立つほどに目借時

水温み「眉雪」吟ずる小舟かな

天鷲も物ともせぬか若葉萌ゆ

梅雨晴れ間母のもの干す顔やさし

『家族』

小林明山

(智子)

家族とは問いかけて見る冬の月

行く先は告げず目深かに冬帽子

会席のつまとなりたる寒椿

下萌や低く飛びゆく鳥の群

芝居はね積る想いの春時雨

濡れ縁に入りし花びらいとほしむ

『生きる』

鈴木陵人

(重成)

病癒へ退く病院の松飾

生けるものみな芽吹きあり春動く

日脚伸ぶその一言で春動く

花の下ランドセルの児駈けにけり

縄文の時代も斯程や若葉萌ゆ

子等走る若葉の森を我がものに

『偶作』

徳本順治

(順治)

松飾立つて数ふる齡かな

春浅し窓越しにみる庭景色

川底に魚影の跳ねて水ぬるむ

吟楽の友集い来て花筵

雨上り池塘に香る若葉かな

烧野原紙芝居みし夏帽子



『梅雨茸』

橋本千舟

(隆二)

舟溜り舳先の飾り潮に濡れ

春めくや汀の波の音こまか

用水に日の班のゆらぎ水温む

黒堤に露天の並び桜祭

ポンプ小屋錠錆びてあり柿若葉

林中の土留めの丸太梅雨茸

『花』

八田玄猷

(豊)

バスを待つ子の声高し入園日

鈴蘭や小さな坪に音色満つ

咲き誇る辛夷の白き休刊日

鯉幟目ざとい声は女の子

雨上がり藪鶯の声近し

稿上がり罌紫陽花に目を休め

『春爛漫』

林 如泉

(治一)

どんと焼きみどりの空をこがしゆく

春うらら小鳥ざわめく池の淵

馥郁と香る桜に風そよぐ

花満開歩む池辺は人の波

賑わいの花鳥風月水ぬるむ

手を引かれ歩む池辺は春爛漫

『希望』

藤原 壽

(寿子)

読み初めや江戸豆腐屋のものがたり

心にも敷居のありて成人日

蒲公英や昨日今日明日信じたく

復興の希望の力芽ぶきかな

石蹴りも缶蹴りもなし春休み

目標が人を動かす二輪草

『徒然』

本多弘輝

(弘幸)

陽光を浴びて香るや梅の花

不忍池まなかに桜並木道

新緑や箱根の山を孫と越え

鯉のぼり高さを競う電波塔

案山子にも帽子をかぶせ山田かな

ガラス器の水に冷麦ほぐれをり

『想い』

本多桜子

(敦子)

初夢を語る夫の今は亡く

鶯の初音を旅の宿で聞く

梅一輪寒さに耐えて時を待つ

水温み生あるものに気を与え

二輪草夫婦のように寄り添ひて

夏帽子浮ぶ波間や天窓洞

『はつゆ』

細川をさむ

(修)

詩を吟じ孫に聞かせるはつゆかな

句出でよ炬燵に頭ひねりゐて

甲羅干す親子の亀や水温む

門前の朝市八重の木瓜の花

屈み見て勿忘草に想い寄せ

地割れして親竹に添ふ今年竹

『今年梅雨』

前田道人

(道紀)

留守電話とほく遠くの寝正月

とろけさう春眠にゐる猫の腹

新卒の教師直立新学期

居易のゐて淵明も酔ふ桃の郷

すぐそこと言はれし里の汗一斗

荒れぬこと祈る媪の今年梅雨

『春うごく』

三須 いくよ

(以久代)

松飾り風が連れくる阿修羅像

春うごく鳥の告げゆく斑ら雲

水ぬるむ長靴ばきの住持職

外にも出よ佐保姫がよぶ花万朶

子を抱く母の笑顔や若葉もゆ

梅雨ぐもり空の重さや早よ帰る

『この空に』

耳塚 のぼる

(昇)

この空に神知ろしめせ松飾

子らの声校舎にはずみ春動く

身構えし鷺の黄足や水温む

老犬に引かるるままの花巡り

満目の緑に老いの身を浸し

登校の子等みな無口梅雨に入る

『蠟梅』

湯山 得自楼

(徳次郎)

蠟梅の馥郁として客集ふ

坪庭の土を擡げし霜柱

推敲の一区切りつき蜜柑剥く

孤高かな古木となりし梅の白

子規庵の文机に置く君子蘭

大竜巻つくばを襲ふ若葉時

『選六句』

岩崎 龍慶

(泰俊)

百歳は通過点なり日向ぼこ

朝日新聞

木枯やふかふか猫のあつたかそう

NHK

弁当の膝に冬日のありにけり

朝日新聞

井戸水の温しと思う今朝の冷え

NHK

朝寝して起されざるもまた愁ひ

朝日新聞

治りかけなほりかけては春の風邪

NHK

楽しい俳句作りと自作を吟ずると言う事で、平成二十二年四月にスタートしました。同時に世話役としてお手伝いを致す事になりました。現在は、会長を初め二十名余のメンバーがお忙しい中参加頂いております。私も俳句の実作者として皆様と一緒に勉強させて頂いております。先ず俳句を知るためには、季語と句の鑑賞が肝要と言う事で皆様に勉強をお願い致しました。大変難しい注文でしたが、皆様の努力と勉強に感謝申し上げます。沢山作り、沢山の名句を読む事が大事で、新聞の俳壇よりの選句をお願いしております。此れは皆さんの、作句力と選句力の涵養を目指しております。俳句は日常の出来事の自分史です。たつた十七文字で人生の喜びを得られる文学です。「継続は力なり」と言います。どうか続けて俳句を勉強して頂きたいと思えます。最後に皆様のご健勝と、ご健吟をお祈り申し上げます。

俳句自作自詠研修会役員

参 与	鈴木菊地	磯田徳本	岩崎池田	林八田	耳塚小原
運営委員	前田顧問	湯山顧問	橋本リーダー	本多	川口
				川口	細川
				編集担当	企画担当
				運営担当	
				編集担当	
				運営担当	
				企画担当	

俳句自作自詠研修会の行事等

- (一) 例会 毎月第二火曜日午後  
基礎研修・自作自詠・句評・  
部外講師の指導など
- (二) 行事 吟行会・納会・特別研修  
その他
- (三) 句誌の発行 原則一月・七月  
年二回の発行